

特集

対話

対話は日々営まれる活動ですが、その働きをとらえるのはけっこう困難です。言葉はいつも誰かに向けられ、その応答を含みこみつつ発話されます。したがって、言葉の意味は発話主体の中だけでは完結しないことになります。多様な聞き手を潜在する対話活動は心的世界の形成にも大きな役割を果たします。このような対話の基本的な特徴をとらえるため、対話的自己論（溝上慎一、以下敬称略）、バフチンのダイアログ論（田島充士）、脳神経科学・身体運動意味論（月本洋）の立場から執筆いただきました。

対話は討論とはちがって、一人の意見に集約させることではありません。他者との間で体験の意味を共有し、新たな意味を生成するものです。一つの言葉、考え、体験が互いにつながりあい、補っていく集団思考ともいえる活動を導きます。対話は実践において新たなパラダイムを提供します。葛藤解決のための実践的方法としても対話が重みを増しています。一例として、リスクマネジメント（矢守克也）の実践から執筆いただきました。対話の可能性をともに探求しましょう。

（森岡正芳）